

# 歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



第2回写真コンテスト 最優秀「長谷堂城山の四季(春)」 山形市・長澤伝八郎氏撮影

- ◆ 最上氏研究前進のために(二)
- ◆ 山野辺義忠とその時代
- ◆ 歴史随想「三つの故郷」
- ◆ 俳句「義光像」

No.9

2002年3月発行

財団法人最上義光歴史館

# 最上氏研究前進のために(二)



栗野 俊之

最上領の城館に関する基本的な文献とされてきたものに、丸山茂著『最上四十八館の研究』(一九四四年、『最上四十八館の研究』歴史図書社、一九七八年五月復刊)がある。内容についてはのちに述べるが、この書は丸山茂氏が財団法人斎藤報恩会へ提出した研究成果報告書である。

丸山氏は、同財団から学術研究費の補助を受けて「山形県下に於ける古城址」の研究を行い、第一部「最上四十八館の研究」、第二部「城塞址を中心とする置賜庄内両地方の政治史」、第三部「山形県下城塞の築城学的考察と其の城下町の構成」の三部作として結実する予定であったが、第二部・第三部は知られない。太平洋戦争の激化と敗戦、戦後の混乱のためであろうか。ともあれ、三部作の構成を見ると、第二部が置賜・

庄内を対象とすることから、第一部の「最上四十八館の研究」(歴史図書社の復刊本は「館」を「館」に替えている)は、村山・最上の城館址を対象とすることがよみとれる。

## §

さて、『最上四十八館の研究』は七章からなり、その構成は最上氏の歴史に沿っている。つまり、延文元年(一三五六)斯波兼頼の山形入部、南北朝期から室町期の最上一族の分封、天正九年(一五八一)の最上郡制圧、天正十二年の天童・寒河江・谷地城攻略、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦、元和八年(一六二二)の最上氏改易という流れに沿ったものである。

取り上げられている城館は、具体的な記述のないものも含めて、七十七である。その記述は村山・最上の城館で占められ、庄内の城館の記述は若干あるのみで、由利郡では本庄館が唯一取り上げられている。城と館の区別は明確ではない。城がつくものは、山形城・寒河江城・左沢城・谷地城・白鳥城・小

国城・延沢城であるが、第七章第三節「最上四十八館の整備」では、山形城以外はすべて館とされている。戦後においても、かつて城館が存在した山を「シロヤマ」ではなく「タテヤマ」と呼ぶのが一般的であり、江戸時代以来、地元でも「シロ」ではなく「タテ」と称してきたことを反映していると思われる。

その記述方法は、古文書・系図・縁起・過去帳などによる城主の考察と古地図・地形図・鳥瞰図・現地調査による城館の考察からなる。研究の時代的な背景から、実測図や発掘の成果というような手法は取り入れられていない。その内容は、城館を基軸とした最上氏の歴史と最上家臣団の研究といえ、現在でも基本的文献として取り上げられるべき優れた研究といえよう。

## §

「最上四十八館」という名称について、丸山氏自身は次のように述べられている。

此の時代(最上家覇権時代)が即ち所謂最上四十八館の防衛陣を

構へた黄金時代であつて、最上家隆昌の最高峰点であつた。最上家末期の攻防陣營の数を俗に四十八館と謂われているが、巷間に伝わる何れの記録を見ても、其の城塞の数は決して四十八に止つてゐない。筆者が調査した範囲内に於いて五三、五四、六五、七五、七六といふ数字である事から観て、四十八といふ数字は、必ずしも城塞の直感数ではなく、単なる抽象数であつたらしく、其の数の起りは、いろは四十八といふ古事の語呂に因んで、最多数の意を含ませたか、若くは兼頼入部当時の封土、最上郡四十八郷の数字に倣つたかの何れかであらう。

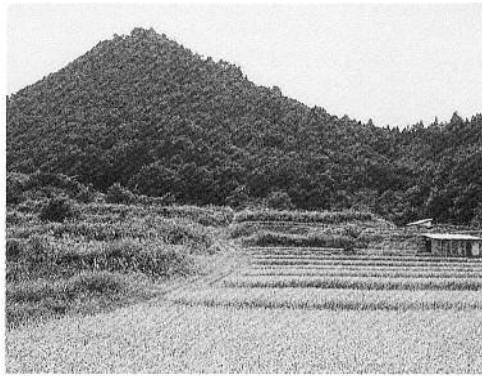
と述べられており、「四十八」という数字については、単なる抽象数として疑問を呈されている(同書三三頁)。ただ、「最上四十八館」という呼び方は既に存在していたようであるが、いつから誰が、このような呼び方をするようになったかは未詳である。最上家覇権時代とは、関ヶ原合戦ののち最上義光が慶長六年庄内、慶長七年由利郡を加増されて以後、元和八年の改易までの時期にあたり、この時期の最上氏の城館が「最上四十八館」ということになる。しかし、この書には、庄内の城館については若干の記述にとどまり、由利郡は本庄館のみであり、最上領の城館の

研究としては、不十分の感を免れない。問題は、この「四十八」という数字が、丸山氏の意図とは別に、その後一人歩きしたところにある。誉田慶恩著、日本の武将60『奥羽の驍将―最上義光―』（人物往来社、一九六七年六月）には「最上領では大身豪族層の城下町集申が未熟で、領内各地に城塞を残し、俗に最上四十八桶と称された」と記述されている（同書二二―頁）。大身豪族層の山形城下集中が未熟であったかは疑問であるが、ここでは丸山氏が最上家覇権時代と呼んだ時期の城館を「最上四十八桶」と称するとしている。

### §

ところが、『山形市史』上巻、原始古代・中世編（山形市、一九七三年三月）の「第四章 中世の村山盆地」第二節「室町時代と村山地方」の「3 館・在家の構造と郷村制」に「最上四十八館」の項があり、「最上領では、領内各地に城塞があり俗に『最上四十八館』と称された。四十八城とは、どれどれなのか明確ではなく、はたして正確に四十八あったか疑わしい。最上四十八桶とは、浄土信仰の弥陀四十八願にちなんだ名数だったかもしれない」とされ、四十八という数字にこだわりを見せ、はたして四十八あったか疑わしい、とまで述べている。執筆者は誉田慶恩氏である。

しかし、この四十八という数字にこだわることは無意味である。つまり、最上領国の城館数は四十八ではない、ということである。中世には郷数や信仰に関わる数字として、八・十二・十三・四十八・六十六・八十八などの数字が良く使われている。「最上十三観音」「四国霊場八十八ヶ所」や菅田氏が言われる「弥陀四十八願」などである。信仰に関わるものは別として、八は末広りの縁起がよい数字であり、四十八は「いろは四十八」の数字であるが十二の四倍にあたり、六十六は「日



最上領最南端の砦・高樞城跡（上市市）

本六十六カ国」の数字で、三十三はその半分である。四十八という数字から身近なものをあげれば、相撲の決まり手「四十八手」があるが、実際の決まり手はこれより遙かに多いのであり、実体を示すものではない。

つまり、「最上四十八館」という呼称は、

基本的に最上領の城館が多いということを示すが、実際に城館を数えて四十あったとしても五十あったとしても、基準となる数字である四十八に代表させるということなのであり、最上領に四十八の城館があったという意味ではない。郷数も同様であり、ある地域の郷数が三十三郷とか四十八郷と言われるのも正確な数字ではなく、その程度の郷数であるという意味である。江戸時代の村を基準に郷数を数えても三十三とか四十八にならないのは当然なことである。

### §

この数字に関連するものとして、古くから言われているものに「天童八桶」「由利十二頭」がある。

「天童八桶」は「最上八桶」とも称されるが、「最上八桶」の名称は不適切であり、天童氏を盟主とする国人一揆という意味で「天童八桶」が相応しい。戦国期の「天童八桶」とされる領主には、天童氏・延沢氏・飯田氏・尾花沢氏・館岡氏・長瀨氏・六田氏・成生氏の八氏があげられているが、これは八という数字にこだわった数え方と言わざるを得ず、このほかにも東根氏や細川氏などがあげべき領主が存在する。例え十氏になっても、この国人一揆は「天童八桶」と称されるのである。

## 栗野俊之

（あわの・としゆき）

一九五六年 山形県山形市に生まれる  
一九七九年 駒沢大学文学部歴史学科卒業  
一九八九年 駒沢大学大学院人文科学研究所 博士課程満期退学  
現 在 駒沢大学講師（非常勤）

### 【主要論文】

「戦国期における大宝寺氏権力の性格―上杉氏・土佐林氏との関係を中心として―」（『山形史学研究』一九九号、一九八三年）  
「戦国期における合戦と和与」（『中世東国史研究会編『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年）

### 【著書】

『織豊政権と東国大名』（吉川弘文館、二〇〇一年）

「由利十二頭」は、戦国期における由利群の領主を端的に表現したもので、由利群には小さな領主が多く割拠したという意味であろう。実際に由利群の領主を数えていくと、十二を超えることは確実である。この場合も、例え十三や十四になっても「由利十二頭」と称されるのである。

近年、全国的規模で城館跡の調査が行われ、また城館跡の発掘が進行して新たな知見が付け加えられている。最上領でも新たな城館跡が多数発見されており、「最上四十八館」という呼び方は、現在では「過去の遺物」といえよう。

# 山野辺義忠とその時代

山辺町ふるさと資料館館長

後藤禮三

平成十二年は「慶長出羽合戦四百年」に当たり、各地で記念行事が開催されたのは記憶に新しい。それらを通して感じられるのは、近年の最上義光の人物像の再評価である。以前は何故こう

いう評価になるのか、不思議に思う言が多かったのである。しかし、山形市・武田喜八郎氏は自筆書状の文体・文言からの人間性への提言があり、最上義光歴史館・片桐繁雄氏は多様な資料を駆使して解明を深め、「山形合戦」の鈴木和吉氏は実地を自分の足で歩きつづの考察等があり、真の人物像が構築されていくのは嬉しい極みである。

平成十三年の山辺町では、山野辺義忠の山辺辺城入部四百年に当たり、当ふるさと資料館では「特別記念展」を開催して彼の業績と生涯を紹介した。実は、義忠の人物像については義光の場合と同じく一面的で客観性が無く、時代的背景を考慮しない内容で書かれた場合が多かったのである。しかも、それでも当地方では「神様・仏様、そして義忠公」というように、特別に高い

地位を与えられてきた独特の存在でもあったのである。

それでは、「義忠」はどういう人物で、時代をどう生きたのだろうか。彼は最上義光の四男として生まれたが、現在の大石田町深堀地区出身の女性を母とし、楯岡城主楯岡氏の庇護を受けて育ったのではないかという説がある。伊藤芳夫氏、後藤嘉一氏。その縁であろうか、慶長五年、十三歳で楯岡城代に就き、翌年、一万九千三百石・山辺辺城主となって入部している。山辺辺家系図は義忠が最上家の證人（人質）として徳川家康の許におもむいたことを記録し、彼に「将来恐るべき怪童である」と言わせたと言われている。

彼の領主としての業績の一つに釣樋堰の改修がある。宮宿方面に西流する鶴川を畑谷の途中で分水して山形盆地に流れるこの堰は、上反田で上江堰（相模地区中心）を開き、沢江堰・若木・古館等）との二つに分け、現・山辺町南部の灌漑用水の安定を考えている。次は寺社への対応で、創設・優遇した寺等、

それぞれに使い分け、その位置も分散して城下町としての万一に備え、同時にそれらに繋がる領民の精神生活の統一と安定を図っている。地理的にも周辺地域の中心に位置するので領民の生活の利便を考え商業の繁栄策をとり、後の九斉市につながっている。

城下町としての縄張は近世のことなので比較的単純であるが、道路の三叉路や喰違いの部分があちこちに散在していることにその面影が偲ばれる。それらを総合した城郭は中世においては最上氏に属する「山野辺氏」が当地方を支配し、白鷹丘陵から山形盆地に突き出た形の舌端部の小高地に主郭、その周囲に副郭がめぐらされていたのを、義忠はそれらを本丸・二の丸としつつ、さらに三の丸を計画し、西方は山岳地帯になるので四の堀を備え、全体としてまとまった城下町を形成している。

ここで興味深いのは、義忠の行なった業績をさらにスケールを大きくしてみると、義光が全て成し遂げているのである。つまり、偉大な父・最上義光の業績を模範として、領内での素晴らし



山辺辺城址碑

しい治世を展開している。だからこそ、長い江戸時代の僅か約二十年間の治世なのに、「名君」としてその名が語り伝えられている。最上家では義光の後継者が頓死して義俊が継いだ、義俊を支持する派と山野辺義忠を宗家という派に分かれてしまい、「最上百万石」と称される義光の偉業が崩れてしまった。この間の経緯については他の大名家の記録等、「第三者」の資料をもっと検討・研究し、真実に迫る必要があると思う。「武家諸法度」「武士道」等、当時の武家社会の規範を考えると、彼の行動は時代の中で生きていくのが分かる。後に水戸・徳川家に客分家老として一万石で招かれ、その子孫は藩主・徳川家と婚姻関係を深め、その補佐役となっている。彼の人生は山形の地では開花不十分でも、水戸徳川家においては考えられない程の大活躍をしているのである。



瓜連町常福寺 山野辺字新墓地

### 中丸玲子

私が生れたのは米沢。父の仕事の關係で育つたのは酒田、嫁いだのは山形、幸せなことに三つの故郷にそれぞれ思い出があります。幼い頃祖母父母の家にお使いに通つた米沢の落ちついた古の家並や、雪の多い冬の生活、そして小学校から高校、青春時代を過した酒田での生活。何と云つても最上川、日本海、出羽の富士(鳥海山)と想い出も多いのです。

山形に嫁いでからは、毎日霞城のお壕端の小路をただ時間を気にしながら通勤した一年、子育て、そのあとも日常生活の中にはいつも霞城公園がありました。春には桜の下で憩い、紫陽花の満開になる季節にはサイクリ

ング、子供達はお壕で釣をしたり、親子で草野球に興じたり、いつも生活にうるおいを与えてくれました。

一九九五年「山形をもつとよく知ろう」女性だけの歴史講座が最上義光歴史館で募集されることを知って、友人と参加しました。それから私の郷土史との出会いはじまりました。女性だけでグループをつくり諸先生達の講座に出席しました。ある時は最上川の舟下りそして白鷹、谷地、仙台、庄内、米沢、市内散策と足を伸ばしました。

殊に上杉と最上の合戦を「もう一つの関ヶ原」として私達グループだけでなく多くの人に参加してほしいと米沢からは井川朝良氏、山形からの誉田慶信氏、コーディネートに片桐繁雄氏を迎えてのトーク&トークでは米

沢を故郷にもつ私には又格別の思いがありました。私の里の先祖は直江兼続と共に新潟からこの合戦のために米沢に入ったと聞いていたからです。先生達の熱のこもった話し合に「敵と味方」何とも複雑でした。昨年出羽の関ヶ原四百年記念式典では激戦地であつた長谷堂で「和敬式」などもとり行なわれたようでも何かしら安堵いたしました。山形に住んで四十年すつかり山形人になつている自分でありながら、サークルの仲間と米沢を巡つたとき、上杉御廟所で先祖の寛政十年(二七九八)榊田楠五郎献灯と刻みこまれた灯籠に再度出会えた喜びもこの日の収穫であつたと思ひました。

山形県を縦断して流れる最上川、酒田では大きくゆつたり流れるように見えるのです。対岸に渡るには以前は渡し舟をつかいました。晴れた日には目の前に最上川を抱き込む日本海、背には雄大な出羽の富士、やがて茜色に町中が染まる夕暮れはこの山形の地では味わえない自然の絵画に魅了されます。この最上川も最上義光の時代に難所の開削や河岸の整備が行なわれやがて舟運が開発され幾多の文化や物産が運ばれた重要な川であつたことも講座で学び、実際に基点・三ヶ瀬を舟下り、芭蕉ラインと又違った急流の醍醐味を味わいました。大石田の乗船寺では文化のみちが運んだ大佛「涅槃仏」を拝する事もできました。酒田

の日和山には往時を偲ぶ北前船などもあつて、商人町港町として繁栄した面影を残しておりますが、今も変らないうのは落日に染まりキラキラ光る最上川と海・町が一つになる眩い程の茜色ではないかと思うのです。

先日は「最上義光をめぐる女性たち」の講座を受講いたしました。義光生誕から一番長命であつた四男山野辺義忠までおよそ一二〇年にわたる妻子の家系の資料にもとづき豊富な話題の中で今まで知る事のできなかった義光の人間像を別の視点から探ることができました。これからも古文書や文学作品などから探る戦国時代、最上家などの講座を最上義光歴史館で受講できる機会を楽しみに又新しい文書の発見なども伝えられる今日この頃、益々興味深い郷土史をせめて私なりに多少なりとも子や孫にも伝えていきたいと思つております。

(山形市・主婦)

### 俳句

## 義光像

俳詩「胡桃」主宰 飯野榮傳

初雀義光像に見え隠れ  
羽の国や義光像の凍て晴るる

駒姫に悲恋のありし細雪

草の芽やをんなを巡る秘話生きる

義光の一矢一址や猫柳

義光の史実ひもとく初桜



高橋信敬先生と女性サークルの仲間たち  
山形城二の丸東大手門にて



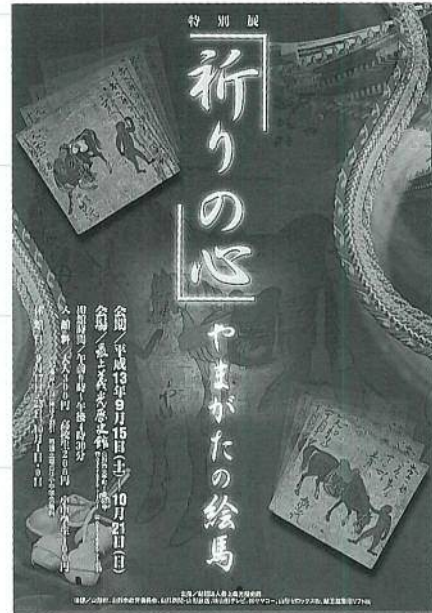
平成13年度  
事業スナップ



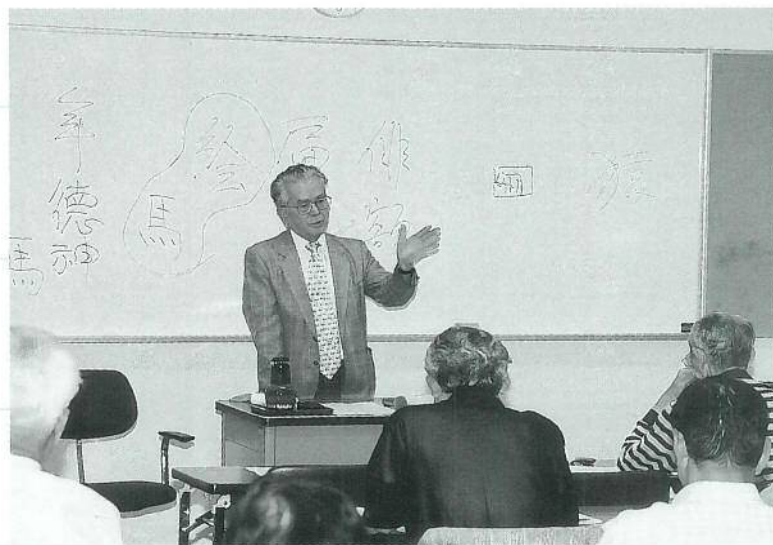
特別展風景



第1回歴史講座 渡邊信三先生



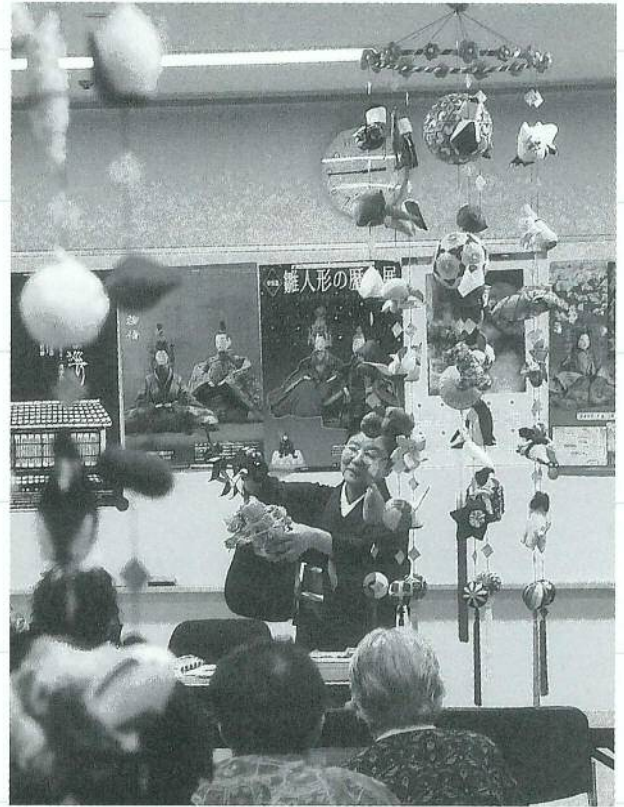
特別展 「祈りの心」やまがたの絵馬



第1回歴史講座 板垣英夫先生



子ども講座「少年少女やまがたの歴史探検隊」  
山形市・国分寺薬師堂にて



第2回歴史講座 安部英子先生



歴史講座「絵馬をたずねて社寺参詣」

## 平成13年度事業

### ◆子ども講座 《7月26日》

「笹谷街道の歴史を探る」～笹谷街道を歩いてみよう～  
小白川一里塚↓小白川天満宮↓法来寺↓笹谷峠↓唐松観音

### ◆特別展 《9月15日～10月21日》

「祈りの心」～やまがたの絵馬～  
展示総数31点(うち指定文化財13点)

### ◆第1回歴史講座 《9月26日・27日・28日》

「やまがたの絵馬」

26日 「武将の祈りと絵馬」

27日 「絵馬にみる山形のくらし」

28日 「絵馬の語る歴史をみよう」

講師/渡邊信三先生

講師/板垣英夫先生

### ◆子ども講座 《10月13日・27日、11月10日》

「少年少女やまがたの歴史探検隊」

～城下町やまがたを探って歴史を発見しよう～

講師/板垣英夫先生・沖憲一先生

### ◆社会科担当教師のための研修会 《10月17日》

「やまがたの絵馬」

講師/渡邊信三先生

### ◆歴史講座「やまがたの絵馬」 《11月6日》

「絵馬をたずねて社寺参詣」

六榎八満宮↓平泉寺↓石行寺↓西蔵王滝山

講師/渡邊信三先生

### ◆夏休み自由研究 《11月17日～25日》

「笹谷街道の歴史を探る」作品展

### ◆古文書講座 《1月11日・18日・25日》

「古文書で読む戦国時代と最上氏」

11日・18日講師/北島教爾先生 25日講師/片桐繁雄先生

### ◆第2回写真コンテスト 《2月2日～24日》

「最上時代の面影を探る」作品展(示公開)

会場/最上義光歴史館研修室 入賞作品19件

### ◆第2回歴史講座 《2月9日・16日・23日》

「やまがたの文化を学ぶ」

9日 「最上川を通った上方文化」

16日 「やまがたの和算」

23日 「最上川」やまがたの難のみち」

講師/横山昭男先生

講師/板垣貞英先生

講師/安部英子先生

### ◆刀剣講座 《3月16日・23日・30日》

「初心者のための日本刀講座」

16日 「日本刀の歴史と鑑賞の手引き」

23日 「武将と名刀」伝説と由来」

30日 「日本刀のできるまで」

講師/布施幸一先生

講師/布施幸一先生

講師/上林恒平先生

研究余滴②  
**義光連歌の語るもの**  
 長谷勘三郎

最上義光は古典文芸に関して深く豊かな教養をもち、すぐれた感覚で見事な連歌を物した。こうした義光を京洛の縉紳が高く評価したことは、同席連衆の顔ぶれからも明らかである。

ところで、われわれの歴史理解は、とかく日本人の書き残した史料に頼りがちだが、16C末〜17C初頭、すなわち義光の時代ともなれば、ヨーロッパ人による文献記録も大いに参考になる。

たとえば古来日本人の理念とされた「文武二道」について、ジョアン・ロドリゲスは、「この両者はいずれも国家にとつてきわめて必要なものであり、あたかも車が動くための両輪、鳥が飛ぶための両翼のようなものだと言われている」と、当時の日本人の価値観に敬意を込めて書き記した。(以下引用は、大航海時代叢書X『日本教会史・下』(岩波書店/1970刊)による。)

その「文事」の重要な部分をなす「連歌」についても、彼らの見方が参考になる。「(文事つまり芸と能のうち)能は学芸を意味し……高官、武家貴族および

公家貴族によってそれ自体名譽とされ、重んじられ、行われている」とし、十種の能を挙げた。

その第八が連歌である。

「多くの人々が一緒に集まって、ある主題なりある詩句(発句)なりにもとづいて作るもので、各自は前の句に関連させて自身の詩句を作つて続けてゆく。これは貴人の間ではよく行われることで、多大の理解力と判断力を要するものである。」と、「能」十種中最も高度なものと彼は見ていた。

現在のわれわれは、当時の大名や貴族なら連歌など常識的な嗜みだったかのように思いがちだが、実際は誰も彼も堪能というわけにはいかなかったのである。清雅幽玄の連歌世界に遊ぶことは、天分に恵まれ、古典文学に通曉した者にのみ可能だったことを、ロドリゲスは示唆する。

そして共通の教養を身に付けた人間同士……大名、公家、宗教学者、豪商らは、連歌を媒介として独特な社交界を形成していったらしいのだ。

数多い最上義光連歌は彼の人間そのものの表現であるが、同時に桃山文化界の思いがけない一面を語りかけているような気がする。

(地域文化史研究会員)

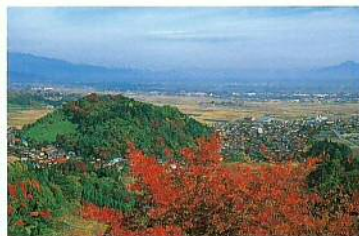
第2回  
**写真コンテスト**

最優秀

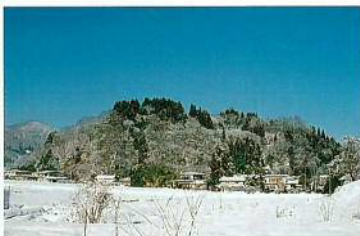
「最上時代の面影を探る」  
 長谷堂城山の四季(四枚組)  
 長澤伝八郎氏



夏



秋



冬

※春は表紙に掲載

ご協力をお願い

最上家にかかわる資料等をお持ちの方、ご存じの方、ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立てたいと思います。よろしくご協力ください。

「利用について」

開館時間 午前9時から午後4時30分  
 入館料 一般 大人300円 高校生200円  
 (小学生100円・土曜日無料)  
 団体(20名以上)大人240円  
 高校生160円 小・中学生80円  
 休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)  
 12月29日から1月3日  
 交通 J R山形駅より徒歩約10分  
 大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成14年3月発行

編集・発行 財団法人最上義光歴史館

〒990-1004

山形市大手町1-153

☎023-6625-7101

☎023-6225-7102

印刷 田宮印刷株式会社